

書評

佐々木現順著

『仏教に於ける時間論の研究』

上杉豊明

1

本書の中核は、南北両伝アビダルマ仏教に於ける時間論と存在論に対する解明である。従来、アビダルマ思想に関しては幾多の労作が世に出されて来た。それと同時に、時間と存在の両概念の厳密な把持を欠いてアビダルマ思想の概要を述べ得べきものではないことは、何人も知らしめられて来たところである。此の度、一書として世に問われた本書には、多様な人間存在と、それに関わる時間の本質を確視すべき種々の問題が取り扱われている。これについてはアビダルマ教学に於いて、本来早く明確にされ得べき点であったことを、本書を吟味するにあたり我々は痛感せざるを得ないであろう。先ず、このことを念頭において、以下、若輩の卑見ではあるが、著者の労作の一端を紹介していこう。

本書の構成は曾って著者が International Congress of Orientalists に発表した The Time Concept in Abhidharma を新たに補足して第一編時間論とし、更に昭和四十四年度安居講本『阿毘達磨順正理論』に補正の部分を加えて第二編存在論と成している。その他附録として、末尾に寂護の Tattvasaṅgraha と寂天の Bodhicaryavatara の各々部分訳が掲載されている。著者の篤学の一端を伺い知れるが、これらインド大乘思想を代表する論師と

の思想上の比較検討は第二編第四章及び第五章に於いて為されているから、通読していくには有益であろう。

ここで、第二編で主に依用されている衆賢造『阿毘達磨順正理論』(Abhidharma-nyāyusāri-sūtra) について一言しておく必要がある。支婁迦讖なる梵本不明のこの論書については、対俱舍論として或は説一切有部の教義を網羅するものとして既知の如くである。従来、北伝アビダルマ仏教研究の主流は、なんと言つても世親の俱舍論であつて、その梵文原典出版と共に一層隆盛を極めた観がある。従つて、順正理論は俱舍論研究の一助としての地位に甘んずる立場にあつたことは看過し得ない点である。他方、順正理論に対する研究(赤沼智善氏による和訳が国訳一切經に存するのみ)は、衆賢思想を明らかすという著者の命題によつて、先に『阿毘達磨思想研究』の中で(上書に於ける著者の見解は、山内得立氏の近著『ロゴスとレンマ』の中で数多く用いられて、多大の影響を与えている)、その一部が披見された。これらで、顧みることの少なかったこの論書に対して、一灯を投げかけるものとして世評を集めたところである。更にそれに続く所論が、本書の依つて立つ所以である。先ずは如上の点をおさえて、順正理論に対する著者の所作を眺める必要がある。

2

第一編は三章に分けられている。第一に時間は五つの category — 自然的物理的時間、心理学的時間、形而上学的時間、宗教的時間、精神物理的時間— に分類されているが、このことは、西洋の時間論に対する仏教の一般的位置づけを意味するものではなく

て、あくまで実践論を構成し修道を可能ならしめる一大論表を提出するものとして興味深い分類である。

本編に於ける中心課題は、縁起論に内在する二種の型(時間)——継時的時間と同時的時間——が南北両アビダルマ仏教に現われた諸様の根幹を究明することに費されている。著者によるこれらの所作の根底には明解な言語分析がなされているから、時間を意味する諸原語の本義を安易に理解し得るであろう。

ここで著者が我々に与えている示唆は、十二因縁の過去、現在、未来なる三時配分の単なる継時論ではなく、継時的時間論を離れては諸種の問題を論じ得ないということである。

次いで、南伝アビダルマ仏教の所謂二十四縁論に於ける同時的時間性が言及されている。即ち、縁は論理的関係性(八九頁)、在り方を指し、「心理的内容即ち心理的出来事に即応した体験的時間がそこに根柢となつて」おり、「時間の同時性は体験時間に於いてとらえられた現在である」(九五頁)と定義されている。この同時性こそが、三時にわたつて継起し流動していく諸行——十二縁起——の中に必然的に根差しているものであらねばならないというのが所論である。第三章で有部教学を中心に北伝アビダルマ仏教の時間論が論究されているが、有部の因果律的時間の解釈、つまりは有部が為した因果性の追従が主体の関係から客体の相互的存在関係へとすめられる時、時間の作用性(はたらき)がその根本にあるとされる。即ち、「在る」という時間的因果性の上に見られる関係(十二因縁)と、「生ずる」という可能性——諸条件に満たされている——を秘めた現在時間関係との二型が指摘されて

いる。これは衆賢の縁起論(此縁性)として標榜されているが、後者に於いて我々は著者の意図する時間の因果性(単一方向的関係)とは別の時間の作用性(相互的關係)を知ることができよう。しかれば、この作用性(karita)の根源は何処にあるかという興味ある問題に対して、著者は「作用性なる原理は両者を(実体と自性)を結びつけるものではなくして、むしろ、svabhāva-dṛavya という両者を具足した統一体そのものの構造から自ずと出でくるもの」(二二二頁)と説く。svabhāva と dṛavya とが同一であるという説に対して、それらが全同でないということとは、著者の最も屢説するところであつて、第二編に於いて問題とされている「三世実有法体恒有」の解釈に対する著者の見解をうながす一因として留意すべき点である。尚、本編に於ける因縁論中では取り扱われていないが、正量部或は犢子部所伝とされる『舍利弗阿毘曇論』中(大正・二八・六七九—六八七頁)に十縁説が説かれている。これらへの思想的考察も急務であるように思われる。

第二編は六章で構成されている。ここでは、従来の俱舍論研究に加えて、経部批判という衆賢の真義を見出し得よう。

その中、第三章で、有部の三世実有論と経部の過未無体説が考察されている。「過去・未来は無実体」であると解する世親と、「単に「作用」が無となつたのみ」とする衆賢との論争は、契経(第一義空經)そのものを「三世実有の否定」と解釈する立場(世親)と、原始経典を正当に解釈する立場(衆賢)とに起因することが先ず強調される。ところで有部は所謂「外境有論」の立

場によって、「三世実有」と論説する訳であるが、その布説の根底を成すのが作用と法体の関係であった。我々の最も関心事とする「三世実有法体恒有」の理解の仕方については、既に宇井博士によって「三世に於て実有なれば法体は恒有なり」と提唱せられた。爾来、この一文、或は宇井説に対する解釈、並びに評価が種々なされて来たところである。ところで、一方著者は本書に於いて有部のこの提説は「三世実有と法体恒有」という二様の立場を説くものであると解し、従来の理解を離して「三世は実有であり、法体は恒有である」と理解すべきであることを主張するものである。問題の多いこの一文に対する如上の見解の裏には、先述した svabhāva と dravya とが共同でないという著者の洞見と、作用の概念把握、更にもう一つは「衆賢が有と称するものは bhava とはなくして sat である」(一五五頁)という「有」概念に対する衆賢思想の披瀝が確固として存在している。同時にそれは世親の有無に対する存在論的立場を明確に打ち出した点で一つの指標ともなる。著者は衆賢の実有論について五種の根拠を提示している(一九六—二〇〇頁)。第一に「還無」と「還去」とは生滅の意味から言っても本質的に相違しないこと、第二に「世親も衆賢も共に生滅の主体を五蘊仮和合そのものでなく三世に置く」としていること、第三に「衆賢は因果相属の理を基準」とし、「世親は因果相属の理を關係性」と解したこと、第四に衆賢は「三世実有を認識論的立場で立証」し、「過未の存在は類推(追憶)せられている限り存在するもので、それ自体は非有である」とする世親と対立すること、第五には「倫理的要請を充たすか否かの問題」ということである。著者の結びとする所は、衆賢に於

いて「有(sat)は論理的有無の概念を越えたと同時に、真偽という倫理的判断をも越えている」(二〇一頁)と言うものである。これらについては、今後更に問題点を含んでいるとしても、有部の提説に対する独自の見解は、何よりも著者の秀逸な卓見であり、大きな功績として称えらるべきであらう。

3

以上、簡単ではあったが、雑言卓見をまじえて、本書の一端を紹介して来た。最後に、二、三感じた事柄を記すならば本書に所頭の衆賢思想を世親との論議でとらえる点は特色としても、それがかえって読者をして衆賢の立場を代弁する如くに思わしめる観がないでもない。しかしながら、梵文不明の『順正理論』の訳語に対する精緻な概念把握とその吟味には、一貫した著者の方法論が流れており、後学にとって有益な指標となる。又、仏教術語をあまり用いないで、理解し易い現代語を用い、読者にアピールする努力が払われていること、或は西洋哲学に対する著者の造詣の深さを思わしめる点も特色である。

時間と存在の不離一体の構造を説明していくという研究目的が本書の中核であった。それらは又、序に於いて著者が自らに投げかけていた「一貫した人生への疑問と触光」に対する自らへの答と解してもよからう。尚、今後更に統いて『煩惱の研究』、及びローゼンベルグ『仏教哲学の諸問題』全訳が出版されると聞き及んでいる。著者の一層の極心を願って、若輩の粗略ではあったが、本書の要点を述べた次第である。(本学大学院博士課程 仏教学) (昭和四十九年九月、清水弘文堂 A5 版、三二一頁、二、八〇〇円)